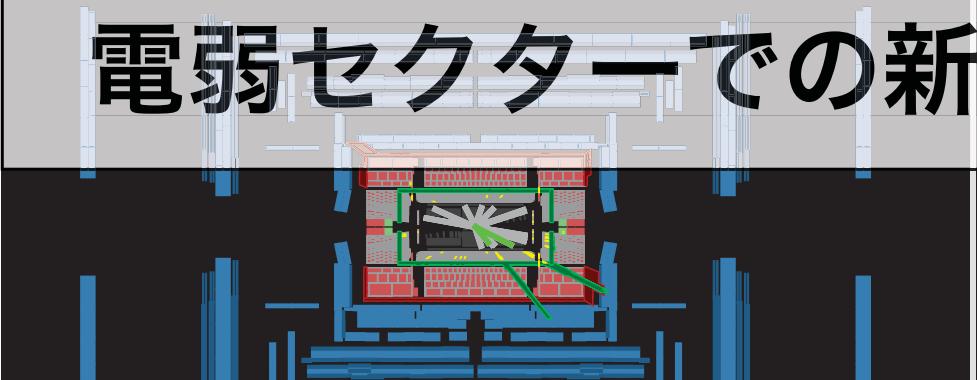


Run Number: 300800, Event Number: 2115672502

Date: 2016-06-03 09:16:15 CEST

# ATLAS実験におけるヒッグス・

## 電弱セクターでの新物理探索



160 ET (GeV)



第3回CiRfSEワークショップ, 2017年1月24日

大川英希

筑波大学 数理物質系・数理物質融合科学センター

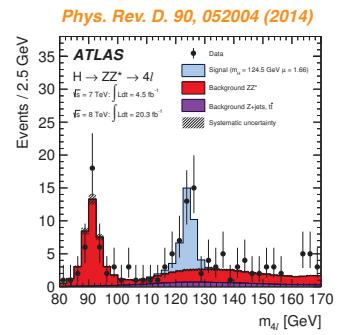
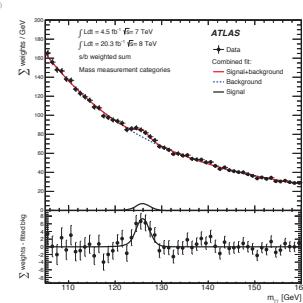
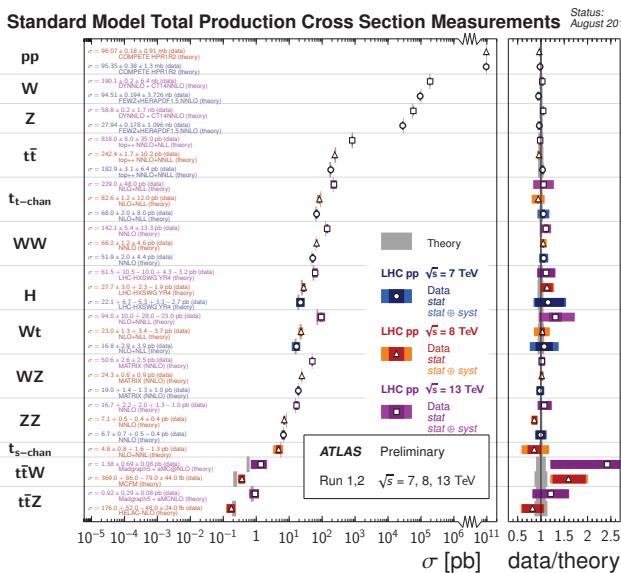


## ヒッグス粒子「発見」を超えて



### 標準理論の圧倒的精度

ヒッグス粒子は見つかったが、ヒッグスセクターの真の構造は未だ不明



- ヒッグス粒子の個数は？又、その詳細な性質は？
- ヒッグスセクターで、標準理論を超えた物理の兆候が捉えられるか？
- 未発見の暗黒物質との関連は？

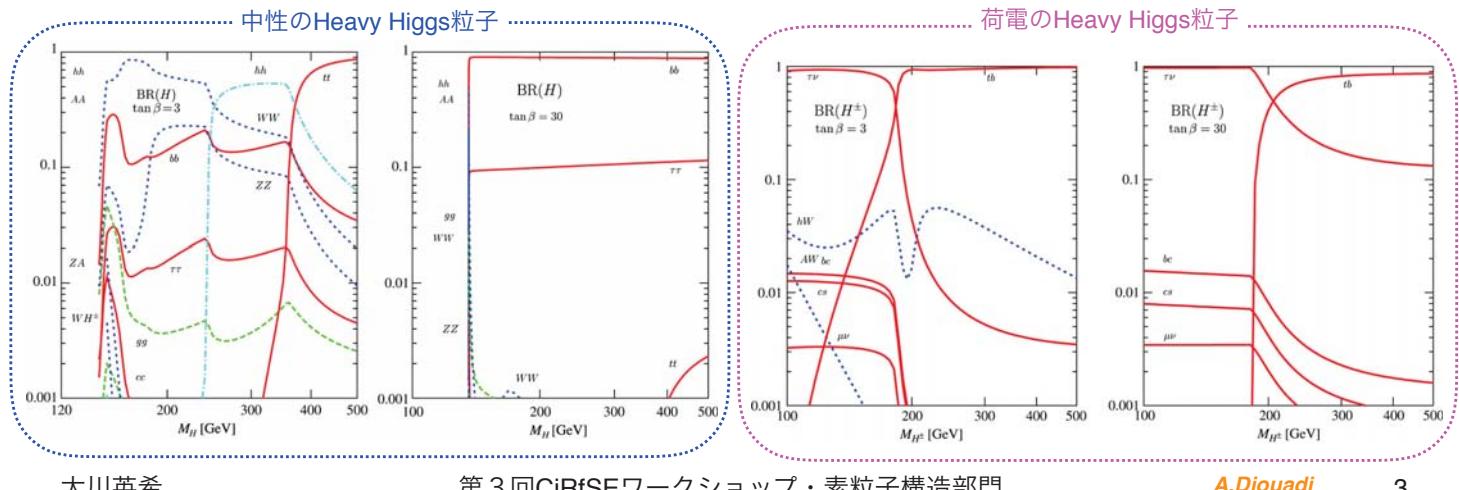
標準理論は、 $\sim \mathcal{O}(10^{12})$ の範囲で生成断面積

などの実験結果と一致

# ヒッグス粒子は一つなのか？



- Doubletが2つあれば、5つのヒッグス粒子（中性: 3つ、荷電: 2つ）。
- 125 GeVヒッグス粒子以外に、electroweak singletが一つあるというモデルも。
- 複数のヒッグス粒子があったとして、どの質量域にいるかは、不明。
- 又、崩壊モードは、モデルやパラメータに大きく依存するため、広範なシナリオを網羅する探索が必要。筑波大学は、 $H \rightarrow ZZ$ （大川、笠原）や $H^\pm \rightarrow tb$ （佐藤、永田、萩原）で大きく貢献。

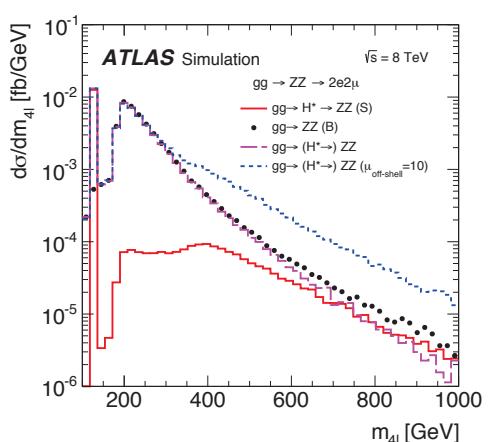
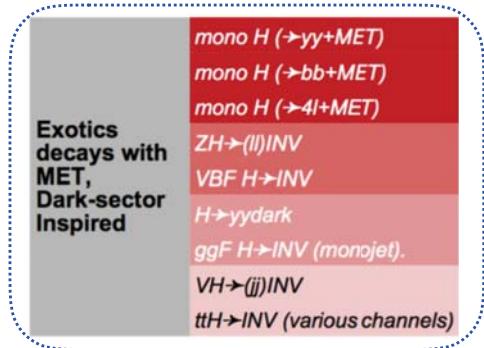


# ヒッグス粒子とBSM崩壊



- ヒッグス粒子の崩壊は、標準理論の予測通りなのか？
- 標準理論が予測するヒッグス粒子の崩壊幅は、4.1 MeV。直接的な測定では、検出器の分解能によって測定できない。干渉を用いた、崩壊幅の間接測定でも、崩壊幅の上限は標準理論の予測の5倍程度。
- 未発見のBSM崩壊モード（暗黒物質, etc.)が、依然として存在しうる。 ATLAS Higgs BSM groupでは、Run-1以来、以下のカテゴリー（Domain）に分けて、探索を遂行。

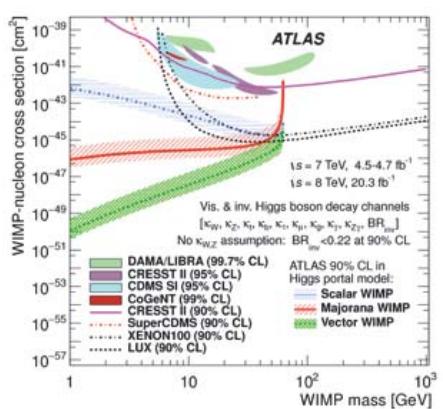
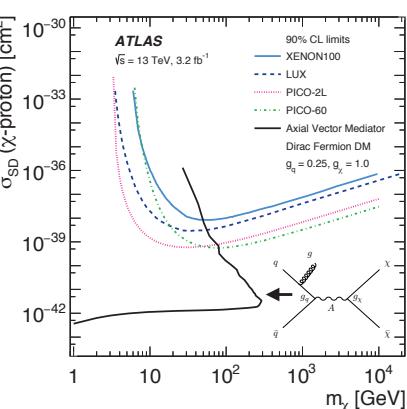
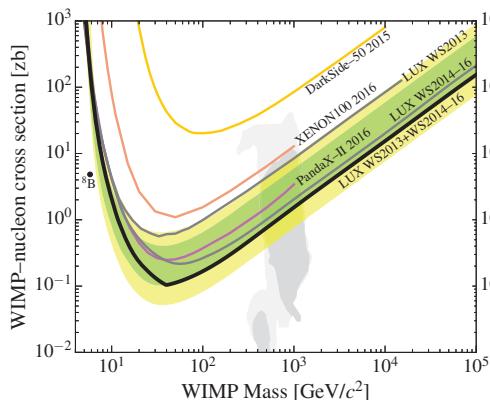
大川とOleg Brandt (Heidelberg)が責任者



LFV, FCNC, rare decays	* $H \rightarrow \phi\gamma, J/\psi\gamma, Y\gamma$
	$H \rightarrow \tau\mu, \tau e, e\mu$
$t \rightarrow cH$ (various channels)	
$H \rightarrow ZJ/\psi, ZY$	

From the ATLAS HBSM Group

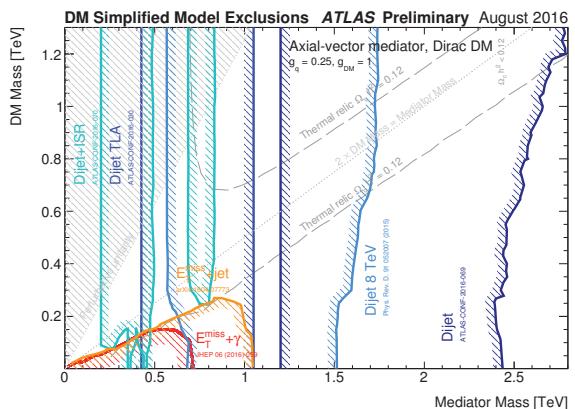
# 暗黒物質とヒッグス



- 暗黒物質の直接探索の感度向上は、近年目覚ましい (LUX, Panda-II実験)
- LHCで感度が勝るのは、限られたシナリオ (低質量域のHiggs-portalや、axial-vector暗黒物質)
- これらのシナリオに重点を置き、広範な探索を遂行中。

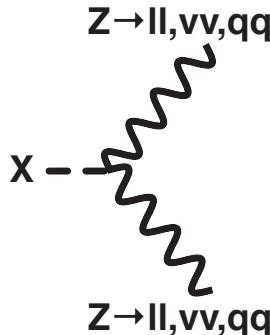
大川英希

第3回CiRfSEワークショップ

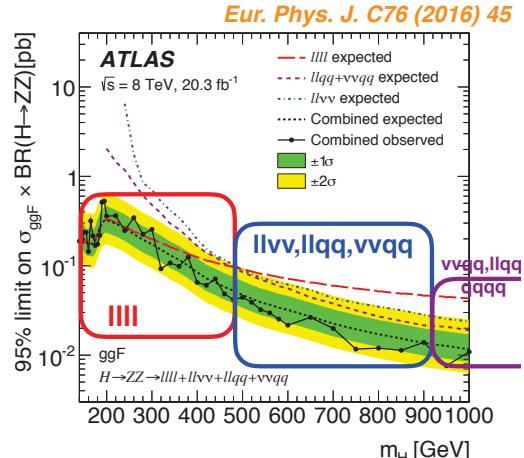


## ZZ共鳴事象探索

# ZZ共鳴事象探索



- ZZ共鳴事象には以下の崩壊モードが存在する。
- それぞれ質量分解能、シグナル感度を持つ質量域等に違いがあり、相補的な探索を提供。



	$\text{BR}(\text{ZZ} \rightarrow \text{X})$	質量分解能	背景事象の量	シグナル感度
llll ( $\text{l}=\text{e},\mu$ )	0.4%	高い	極めて少ない	低質量域
llvv	2.6%	低い (& 横方向情報のみ)	少ない	Sub-TeV
llqq	9.2%	高い	比較的多い	Sub-TeV & TeV
vvqq	28%	低い (& 横方向情報のみ)	比較的多い	Sub-TeV & TeV
qqqq	49%	低い	多い	TeVオーダー

大川英希

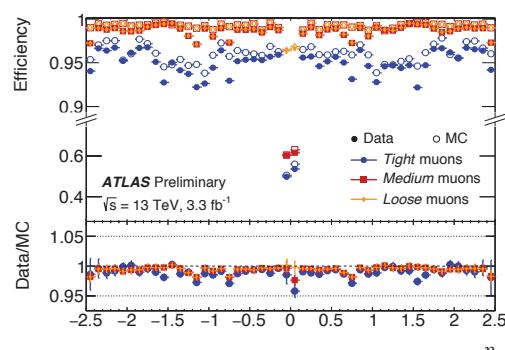
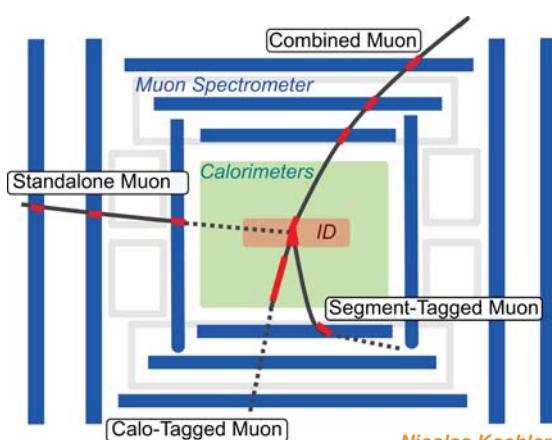
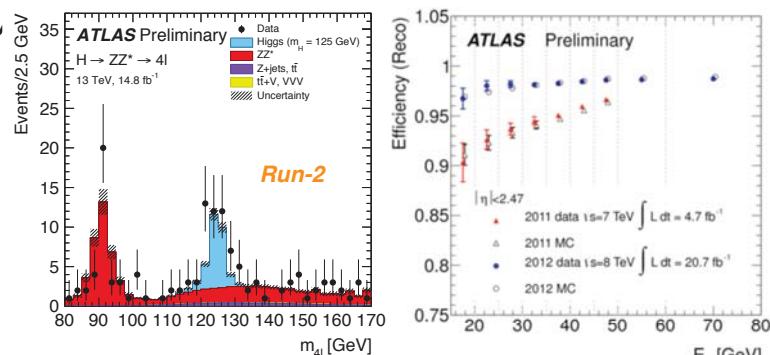
第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

7

# X → ZZ → 4l



- 2012年にヒッグス粒子を発見した「ゴールデンチャンネル」。Run-2でのヒッグス粒子の測定も進行中。
- 電子とミューオンの再構成性能が、探索におけるシグナル感度の鍵。



大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

8



Leptons and Jets requirements	
ELECTRONS	Loose Likelihood quality electrons with hit in innermost layer, $E_T > 7\text{GeV}$ and $ \eta  < 2.47$
MUONS	Loose identification $ \eta  < 2.7$ Calo-tagged muons with $p_T > 15\text{ GeV}$ and $ \eta  < 1$
JETS	Combined, stand-alone (with ID hits if available) and segment tagged muons with $p_T > 5\text{ GeV}$ anti- $k_t$ jets with $p_T > 30\text{GeV}$ , $ \eta  < 4.5$ and passing pile-up jet rejection requirements
Event Selection	
SELECTION	Require at least one quadruplet of leptons consisting of two pairs of same flavour opposite-charge leptons fulfilling the following requirements: $p_T$ thresholds for three leading leptons in the quadruplet - 20, 15 and 10 GeV Maximum of one calo-tagged or standalone muon per quadruplet Select best quadruplet to be the one with the (sub)leading dilepton mass (second) closest the Z mass Leading dilepton mass requirement: $50\text{ GeV} < m_{12} < 106\text{ GeV}$ Sub-leading dilepton mass requirement: $12 < m_{34} < 115\text{GeV}$ Remove quadruplet if alternative same-flavour opposite-charge dilepton gives $m_{\ell\ell} < 5\text{ GeV}$ $\Delta R(\ell, \ell') > 0.10$ (0.20) for all same(different)-flavour leptons in the quadruplet
ISOLATION	Contribution from the other leptons of the quadruplet is subtracted Muon track isolation ( $\Delta R \leq 0.30$ ): $\Sigma p_T/p_T < 0.15$ Muon calorimeter isolation ( $\Delta R = 0.20$ ): $\Sigma E_T/p_T < 0.30$ Electron track isolation ( $\Delta R \leq 0.20$ ): $\Sigma E_T/E_T < 0.15$ Electron calorimeter isolation ( $\Delta R = 0.20$ ): $\Sigma E_T/E_T < 0.20$
IMPACT PARAMETER	Apply impact parameter significance cut to all leptons of the quadruplet. For electrons : $ d_0/\sigma_{d_0}  < 5$
SIGNIFICANCE	For muons : $ d_0/\sigma_{d_0}  < 3$
VERTEX SELECTION	Require a common vertex for the leptons $\chi^2/\text{ndof} < 6$ for $4\mu$ and $< 9$ for others.

$m_{jj} > 400\text{ GeV} \& \& d\eta_{jj} > 3.3$  の場合、VBFカテゴリーとして考慮  
それ以外は、gluon-fusionカテゴリー

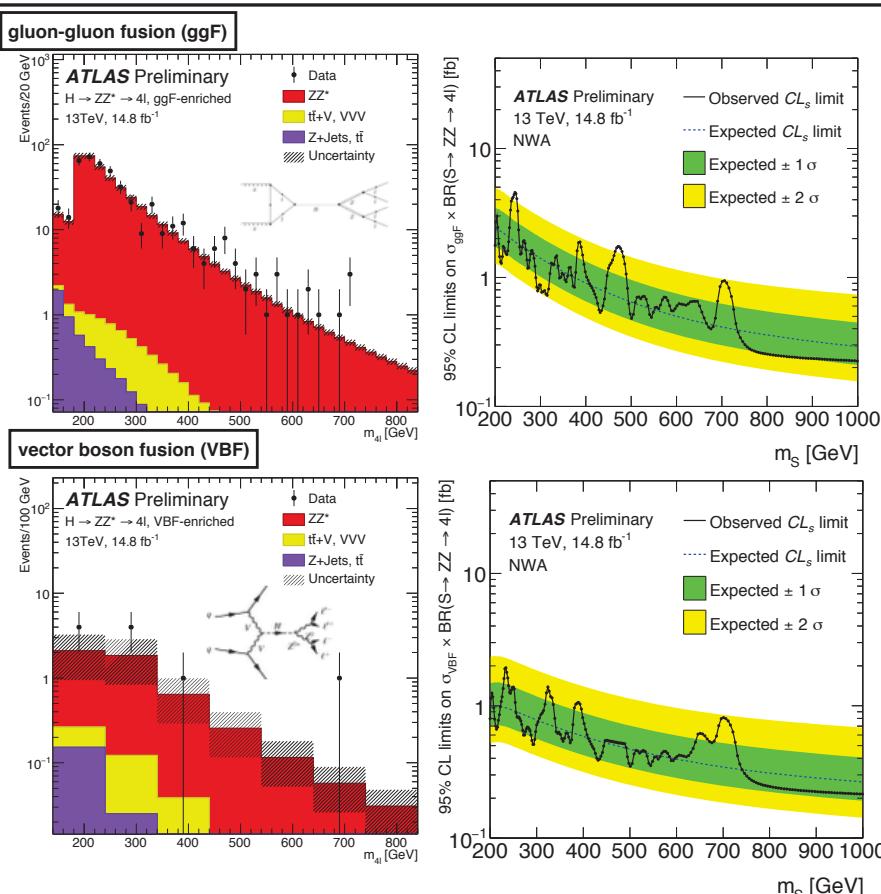
大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

9

- パイルアップ（多重陽子陽子衝突事象）の増大に対して、シグナルアクセプタンスは安定。
- 主な背景事象
  - 標準理論からの  $qq \rightarrow ZZ$ ,  $gg \rightarrow ZZ$ , VBS ZZ事象: MCで評価。
  - $VVV$ ,  $t\bar{t}+V$ : MCで評価。
  - $Z+jets$ ,  $t\bar{t}$ : コントロール領域からデータで評価。

# X → ZZ → 4l シグナル領域



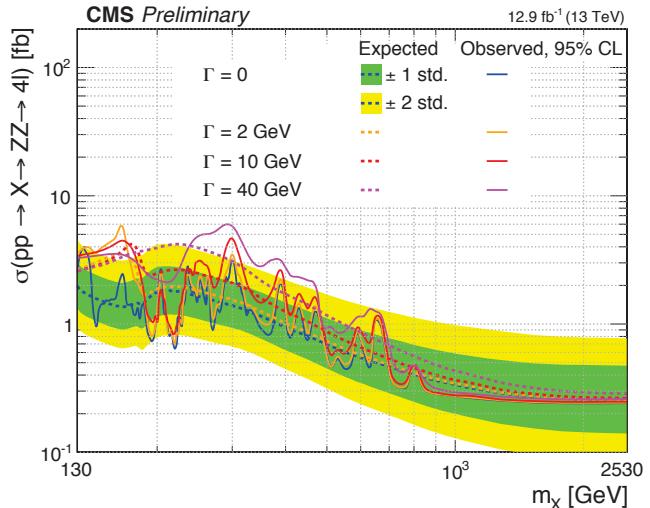
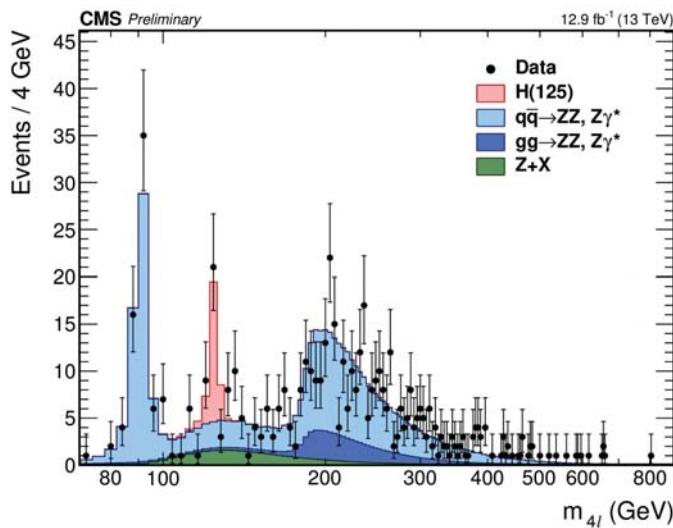
- 質量域200-1000 GeVで、探索。標準理論からの有意な逸脱は見られなかった。
- $2\sigma$ レベルの逸脱は、所々観測された。
- より高統計のデータでの探索と、他のチャンネルでの確認が重要。

部門

10



CMS-PAS-HIG-15-004



- CMSでは、質量域130-2530 GeVで、探索。有意な逸脱は見られなかった。
- ICHEPデータ以降での、他のZZ探索チャンネルの結果は、まだ発表されていない。

大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

11

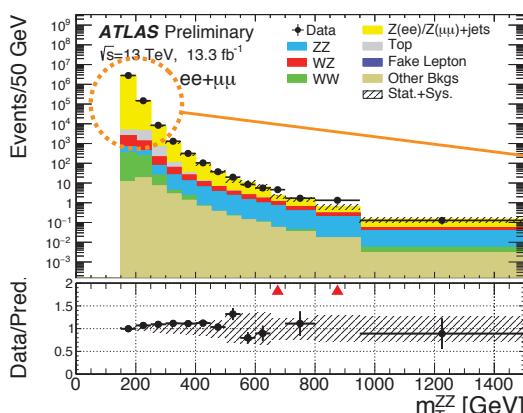
# X→ZZ→llvv



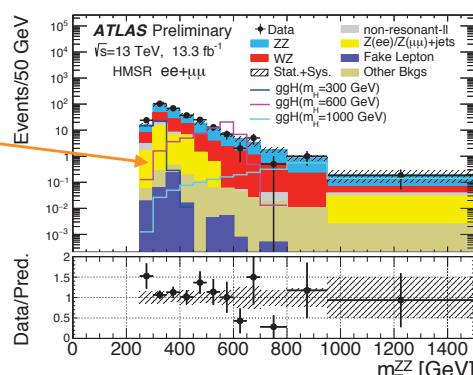
ATLAS-CONF-2016-056

- 最もクリーンなチャンネルの一つで、1 TeV以下の領域で、極めて高い感度を持つ。  
(大川、笠原が貢献。大川は、2012年以来解析グループの責任者。)
- 最も重要な事は、生成断面積の大きいZ+jets背景事象を、シグナルアクセプタンスを落とさずに抑制すること。

Variables	Cut Values
lepton $p_T$ for (leading, subleading)	>(30 GeV, 20 GeV)
$m_{\ell\ell}$	76–106 GeV
$E_T^{\text{miss}}$	>120 GeV
$\Delta R_{\ell\ell}$	<1.8
$\Delta\phi(\vec{p}_T^{\ell\ell}, \vec{E}_T^{\text{miss}})$	>2.7
Fractional $p_T$ difference	<0.2
$N_{\text{b-jet}}$	0
$\Delta\phi(\vec{E}_T^{\text{miss}}, \text{jets})$	> 0.4
$p_T^{\ell\ell}/m_T^{\text{ZZ}}$	< 0.7



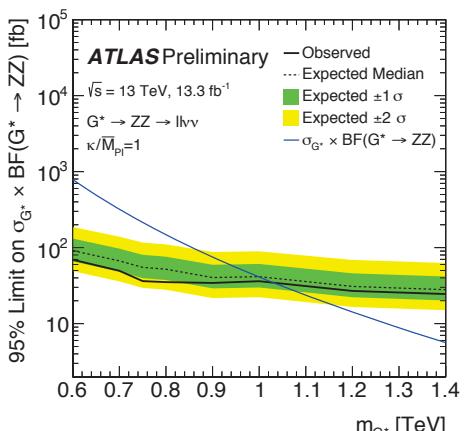
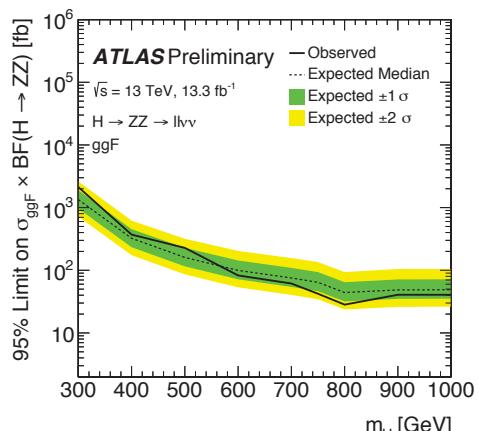
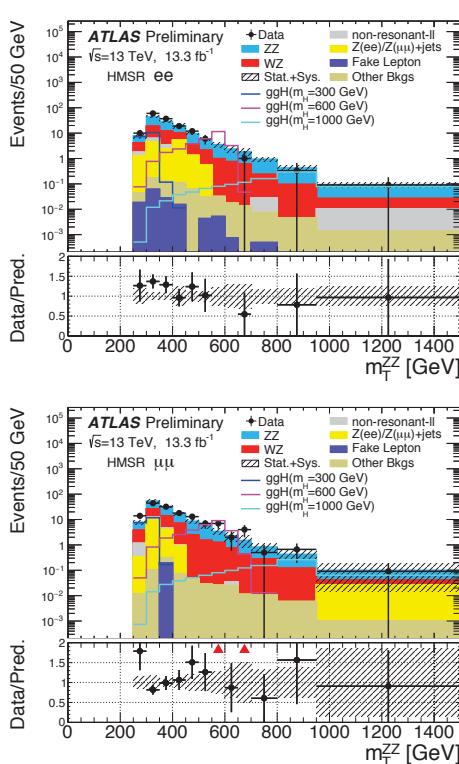
$$(m_T^{\text{ZZ}})^2 \equiv \left( \sqrt{m_Z^2 + |\vec{p}_T^{\ell\ell}|^2} + \sqrt{m_Z^2 + |\vec{E}_T^{\text{miss}}|^2} \right)^2 - |\vec{p}_T^{\ell\ell} + \vec{E}_T^{\text{miss}}|^2$$



大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

12



- 標準理論からの有意な逸脱は、観測されなかった。
- ICHEPでの解析結果の詳細は、本日の笠原君の講演を参照。

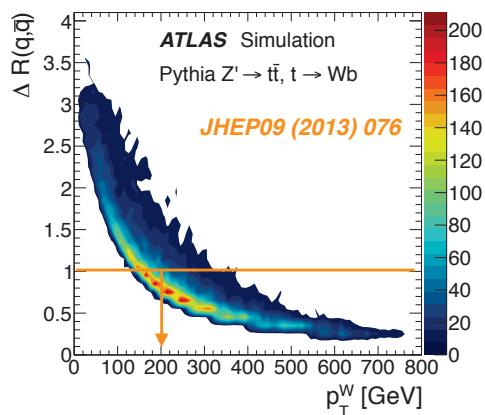
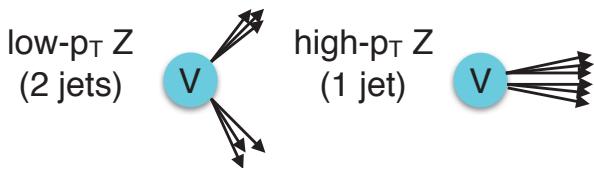
大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

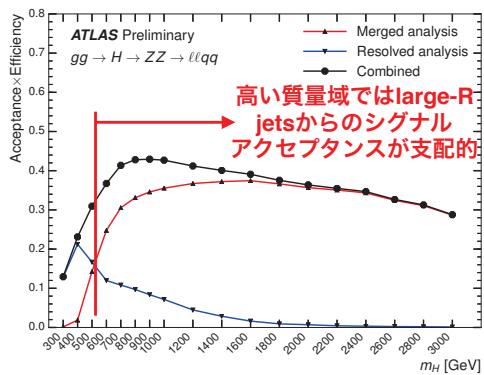
13



## Zボソンのハドロン崩壊を伴うチャンネル



- High- $p_T$  ( $p_T^Z > \sim 200$  GeV) の Z ボソンのハドロン崩壊は、large-R jet (boosted-boson tagging) と呼ばれる手法で、再構成することができる。
- llqq チャンネルでは、それに加えて、small-R ( $R=0.4$ ) jets を用いたカテゴリーも用いる。

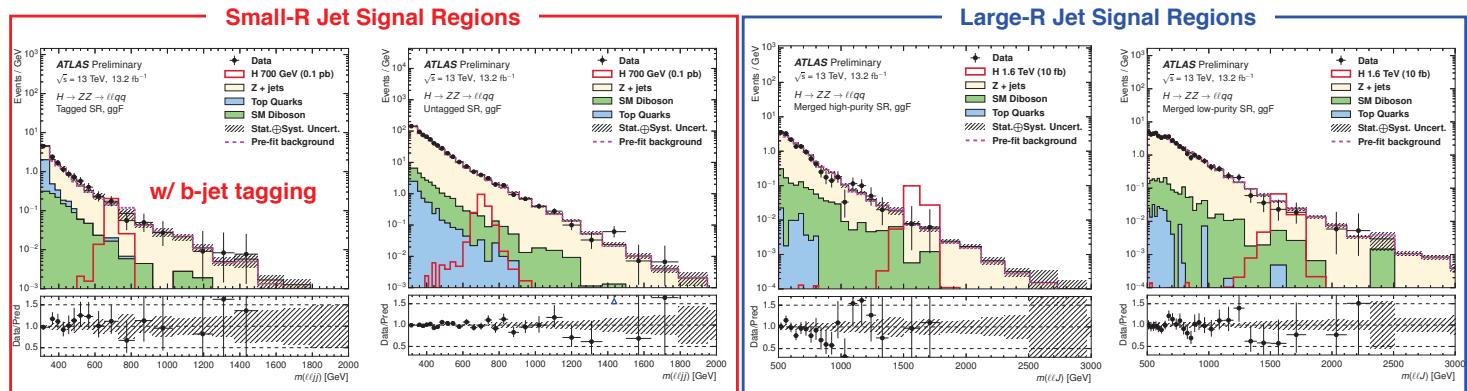


- 大川は、ICHEPの結果(ATLAS-CONF-2016-082)及び、2015+2016の全データを用いた、現在進行中の論文のATLAS実験内部審査員 (Editorial Board)を務めている。

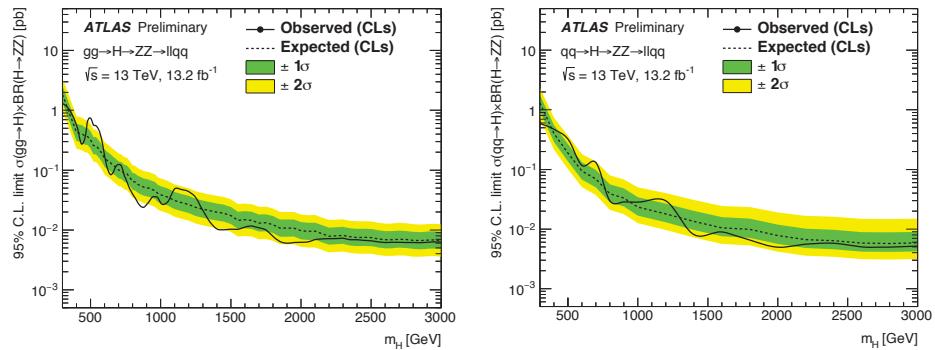
大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

14



- $Z+jets$ が、最も大きな背景事象。  
 $m_{jj}$ ,  $m_J$ のサイドバンドのコントロール領域でフィット。
- 標準理論からの有意な逸脱は見られなかった。

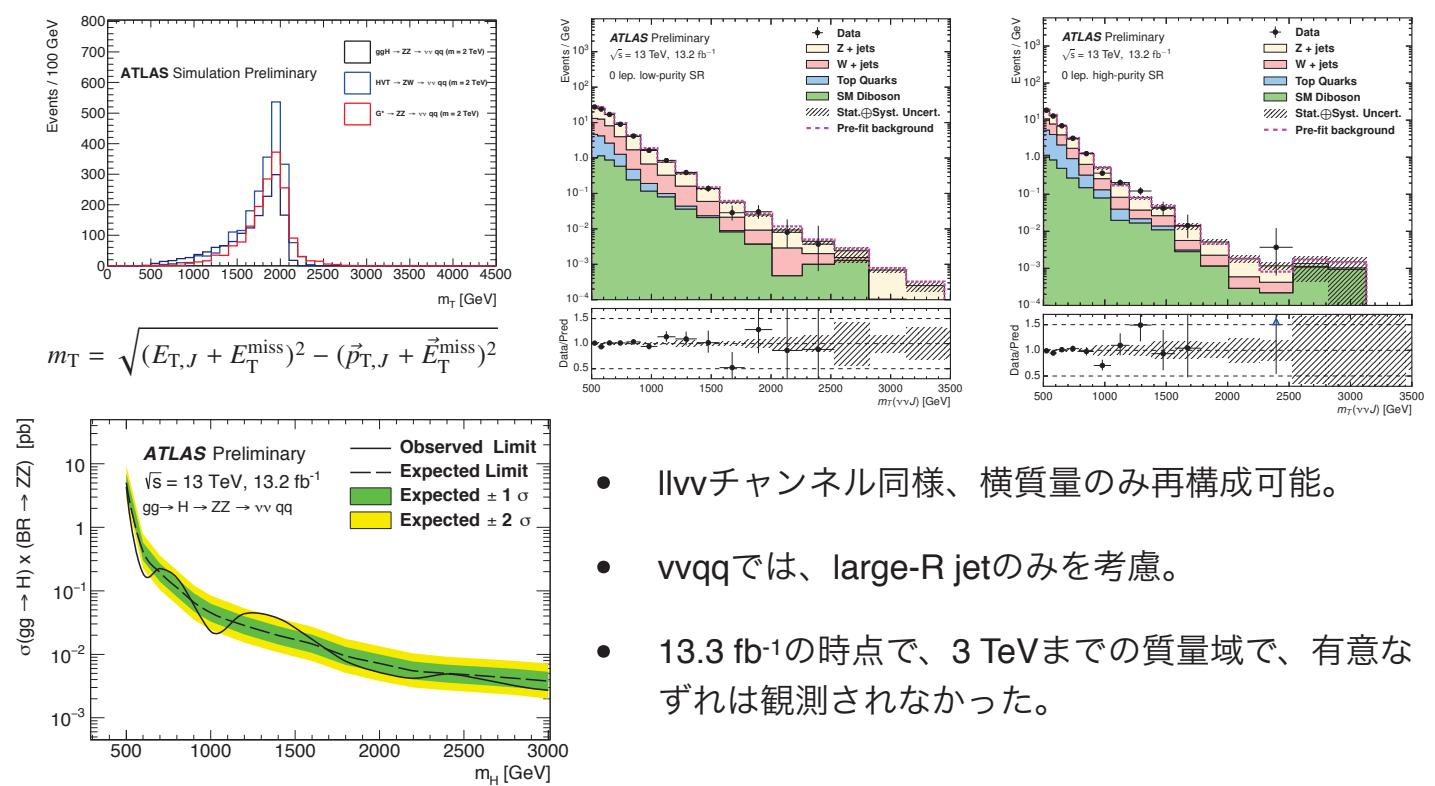


大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

ATLAS-CONF-2016-082

15



大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

16

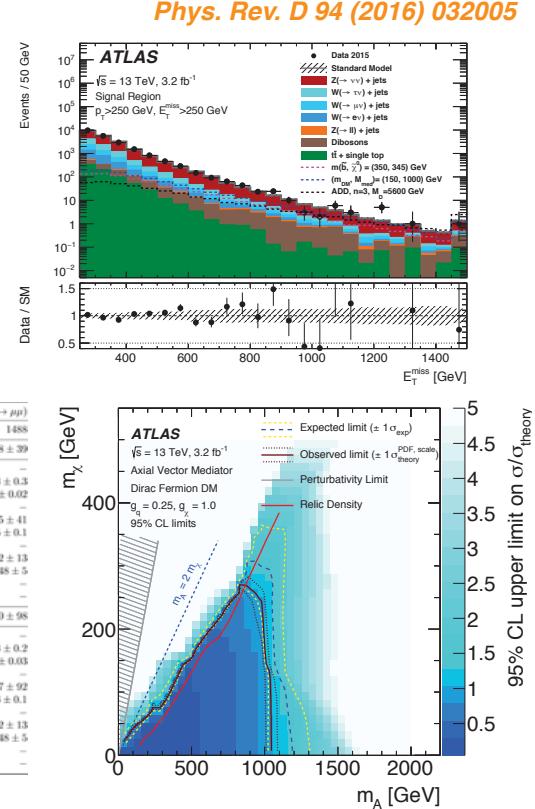
# 暗黒物質探索



## モノジェット探索



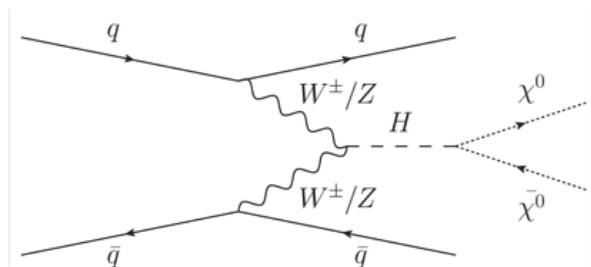
- METトリガー (HLT\_xe70) 使用
- データのクオリティカット(検出器・非衝突事象の除去)
- Leading jet  $p_T > 250 \text{ GeV}$
- MET  $> 250 \text{ GeV}$
- 最大4本のジェット ( $p_T > 20 \text{ GeV}, |\eta| < 2.8$ )
- METとジェットの方向:  $d\phi(\text{MET}, \text{jet}) > 0.4$
- 現在、解析を2015+2016年でアップデート中。
- ただし、シグナル感度が、W/Z+jetsの評価の系統誤差によって、頭打ちはり始めている。
- quarkとgluon由来のジェットを分離する、q/g-taggingという手法を、東工大の陣内・佐藤両氏と開発中。



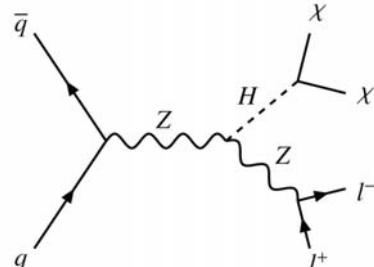
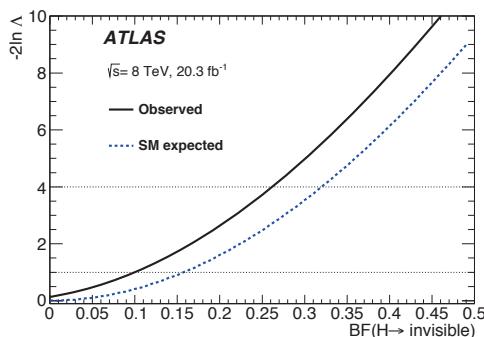


## ヒッグス粒子の非可視崩壊探索の2大チャンネル

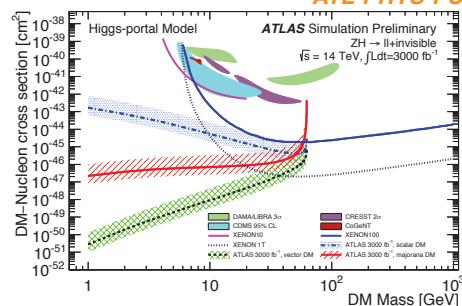
ただし、VBFは系統誤差により感度が頭打ち。ZHは、統計とともに感度が上昇し続ける。



JHEP 01 (2016) 172



ATL-PHYS-PUB-2013-014

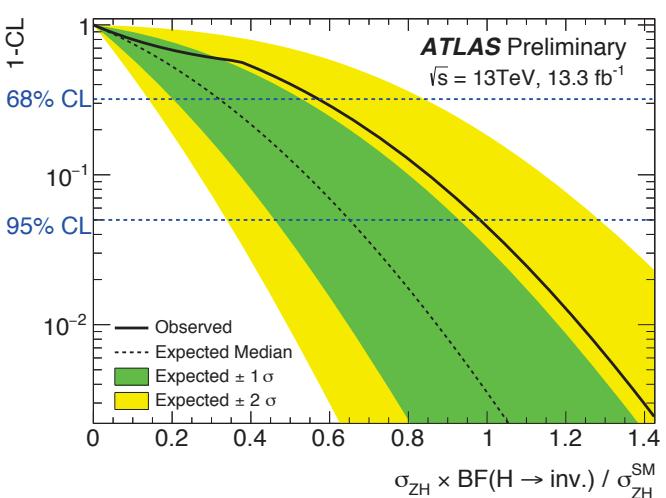
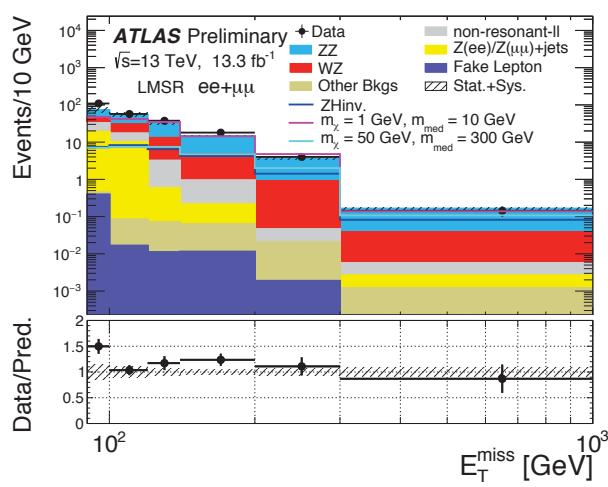


大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

19

# Z(II)H(inv)探索



- $E_T^{\text{miss}}$ の第1ビンと~200 GeVで、予測から若干の逸脱。
- $\text{BR}(H \rightarrow \text{inv.}) < 0.98 \text{ obs}, 0.65 \text{ exp}$  [Run-1では0.75 obs, 0.62 exp] @ 95% CL.
- 解析の詳細は、本日の笠原君の講演を参照。

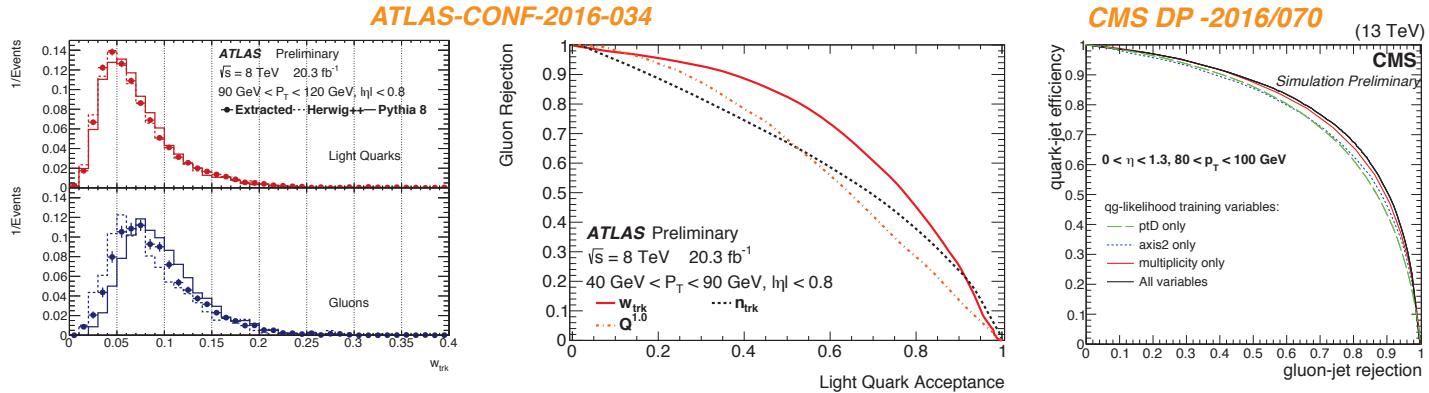
大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

20



# Quark-Gluon Tagging



- Quarkとgluon由来のジェットの内部構造の違いを利用した分離の試み。LEP・Tevatronで多くの先行研究。
- ATLASでは、1変数のみを用いたtaggerを開発。一方、CMSは、多変数解析を使用。現時点、ATLASの性能を上回る(同じworking pointで、背景事象の除去が10-20%増)。
- 現在、多変数解析への移行と、particle flowの導入による性能の向上を目指している。
- 又、VBF解析への適用も目指している。

大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

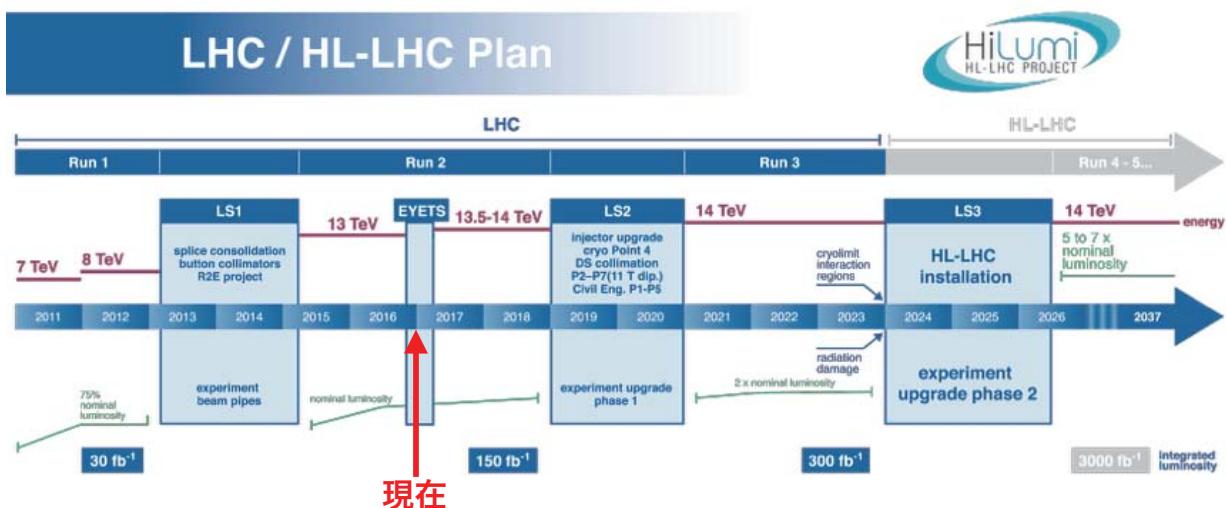
21



# 今後の予定



<http://hilumilhcb.web.cern.ch/about/hl-lhc-project>



- 2016データの統計は、昨年夏の結果から約2倍増大した。本年3月のMoriondで、数々の解析結果がアップデートされる予定。
- 2018年末には、データが $150 \text{ fb}^{-1}$ 取得される予定。その間に、物理解析の新手法の開発も進める。2017年は、測定器・パフォーマンスの研究が最優先。

大川英希

第3回CiRfSEワークショップ・素粒子構造部門

22



- ヒッグス・電弱セクターにおける新物理探索の結果について発表した。
- ZZ共鳴事象探索は、クリーンなチャンネルが多く、シグナルへの感度が高い。複数の崩壊モードで、探索を続けることが重要。
- 又、暗黒物質探索について、いくつかの結果を紹介。今後の高統計データで、シグナル感度を向上させていくことが要請されている。(新手法の開発が必要か?)
- ヒッグス・電弱セクターにおける新物理探索のため、多方面からのアプローチを用いて、発見を目指す。